

巻 頭 言

論文の公開、非公開について

本誌「ヒューマンサイエンス」は、神戸女学院大学大学院人間科学研究科の教員、大学院生などの研究を発表する場として、意欲的な論文、研究ノートなどが掲載され、その多彩さは読みごたえのあるものになっている。このような研究をするときに大切なことは、言うまでもなく先行研究を検索して集めながら読み込む中で、湧いてきた疑問を絞り込んでいき、それをどうやって検証、確認するか、そのことでどのような新たな知見が見いだされるかが評価基準の重要なポイントとなる。

文献検索について、私の学部ゼミでは、毎年、図書館に出向いて、図書館職員の方に文献の探し方をレクチャーしてもらっている。心理学の分野ではサイニーとかが使いやすいし、機関リポジトリとして、全文が公開されているものが増えてきた。いちいち相互利用書で申し込まなくても、全文が読めるのは、便利なものである。それどころか、科学技術振興機構が運営するJ-STAGEのように学会誌を中心とした電子ジャーナル化された論文を検索し、その場で全文を読みプリントアウトとできるサイトまである。私のゼミでは全員スマホを持っているので、心理学関係の学会誌の論文の検索の仕方としてJ-STAGEを教えた。電車の中で、いくらでも多くの学会誌の論文が読めるというのは、なんと素晴らしいことだろう。検索をすると、近接領域の論文も出て来るし、知的刺激に役立てくれる、楽しいゲームである。

このように、論文がオープンにされることはその分野のみならず、多くの人にアクセスの機会を与え、研究の学際的展開や、アイデアの応用なども生み出す可能性があり学問の発展を促すことになる素晴らしい側面がある。しかし、例外的に研究の公開という大きな流れに抗っている学問分野もある。私の所属している日本心理臨床学会の機関紙「心理臨床学研究」は、残念ながら、J-STAGEに参加していない。それは、個人情報扱う事例研究や論文の一部に事例を扱うものが多いこと、また心理テスト等なるべく公開してほしくないものが含まれる論文が多いからである。例えば、左右対称のインクの染みが何に見えるかを問うテストがあるが、なるべく、専門家やそれを学ぶ人たちに公開し、本当にテストとして受ける人には、初めてのものであってほしいという理由から、読者を制限しているのである。このような領域は特殊であろう。しかし、専門家やそれを学ぶ人たちに限定してでも、公開し研究を積み重ねる必要がある。人間科学部・人間科学研究科では、2005年度に研究倫理規程が定められ、臨床心理学分野を中心に人間を対象とした研究を始める時には研究倫理審査を受けるようにしている。本学でも、全学では資金の不正使用などに対応し、各学部でも研究倫理規程が整備される。公開される研究でも当然そうだが、学会員や関係者だけにしか公開しない領域では、なおさら、研究倫理の重要性を理解して、対象者の人権を考えながら研究を進める必要がある。

小林 哲郎
(心理・行動科学科教授)